

| | |
|------------------|---|
| Title | 子どもの生と死：周産期医療から見えること(臨床死生学研究講演会) |
| Author(s) | 斎藤, 薫 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.4, 2012.2 : 17-17 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=3705 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

臨床死生学研究講演会 子どもの生と死 —周産期医療から見えること—

2011年12月16日（金）、聖学院大学総合研究所
カウンセリング研究センター主催による講演会が、
聖学院大学ヴェリタス館教授会室において開催さ
れた。講演者は船戸正久先生（大阪発達総合療育
センター 重症心身障害児施設フェニックス園
長）で、参加者は28名であった。講演の概要は以
下の通りである。

医療技術の発達により、現在では、300グラム
以下の超未熟児の生命も救われるようになってき
ている。しかし、超低出生体重児は育たない事も
あるし、重度障害が現れる場合もある。生まれた
子どもが育たないと分かっている場合、どのよう
な処置を取るのが、子どもと家族にとって最善の
方法となるのかを考える必要がある。

生まれてすぐ、体中に管を付けられ、保育器に
入れられて、家族は新生児を抱く事も触れる事も
できないまま、小さな命が消えてしまう、という
旧来の状況は、家族の悲嘆を長引かせる結果につ
ながることが多かった。最新の「胎児緩和ケアの
概念」では、「不快な症状をコントロールし、家
族が、赤ん坊との死別の準備ができるようにす
る」。体につけるチューブ類を最小限にし、新生
児を家族が抱けるようにすると、死別の悲嘆が軽
減される。子どもを失うことは悲しいことである

が、短い間でも、愛する家族に囲まれて「おう
ち」で過ごし、家族に抱っこされてなくなって
いった子どもは、本人も家族も苦痛が少ないので
ある。

亡骸を安置する霊安室も、従来は地下などの、
暗い場所にあることが多かったが、最近では、最
上階の明るい場所に設ける医療施設も増えてきて
おり、愛するものを失った家族の悲しみを軽減す
る一助となっている。

新生児の医療にとって大事なのは、「子どもの
最善の利益」を中心に、医療チームと家族が情報
を共有し、予後の見通しから、共に最適な医療の
選択ができるようにすることである。現在の小児
医療の最大のテーマは、自分で意思表示ができな
い子どもの人権と尊厳をいかに守るか？とくに生
命予後不良な子どもにとって、最善の医療とは何
かを考えることである。そのために、今後すべての
医学部、看護学部 of 必須教育として、「臨床倫
理学」「緩和ケア」の基礎講座を導入し、技術偏
重の日本の医療を変える土台とする事が重要であ
る。

（文責：斎藤薫 聖学院大学大学院アメリカ・
ヨーロッパ文化学研究課博士後期課程）

（2011年12月16日、聖学院大学ヴェリタス館教授
会室）



講師の大阪発達総合療育センター重症心身障害児
施設フェニックス園長 船戸正久氏